



図書館だより

No. 17

1990. 12

上田女子短期大学附属図書館

◇◇ 図書館コンピュータ化特集 ◇◇



コンピュータ化にあたって

館長 清水 正 男

情報科学を主要領域とする米国大学図書館との第一回日米大学図書館会議に参加した。のち文部省在外研究員として米国の大学現場で学び大きく啓蒙を受け、そして二十余年。

その間、文部省は数次にわたり「大学改善要項」を発表した。この要項に則り大学図書館の近代化、特に学術情報流通体制の確立が図られようとしている。これを受けた各大学では鋭意

この線に沿って、大きな努力と試行を重ねているというのが実情であると言えよう。

このたび本学図書館でもいよいよL.Cによる貸出業務等の本稼働開始を見ました。これは大学当局をはじめ全教職員・関係各位の御助力の賜と厚く御礼を申し上げます。この上は、大学教育の基底を支える館の格段の発展を期したいと念じていますのでよろしくお願い致します。



読書との出会い

井出賢次

10月12日に永井龍男氏が亡くなった。その記事を読みながら、学生のころ読んでしみじみとした感動を受けた短編小説「黒い御飯」（大正12年作）を懐かしく、しかもあざやかに思い出した。貧しい家庭にあって心の暖かい家族間にかもし出される愛情や親子兄弟の心の交流等が巧みにしかも暖かい筆致で描かれている。

庶民の家族の哀歓をきめ細かくすきのない構成でまとめられ、ほのぼのとした人情味が読者の心を誘いこむ作品である。特に題名ともなった子供の着るひどく汚れてしまった紺がすりの着物を父が自分の手で染め直してくれ、それに使用した釜をきれいに洗ったのにもかかわらず、炊きあがったうす黒い御飯を、だれかが「赤い御飯のかわりだね」と言うあたりの結びに近い部分は、当時の庶民の家族の暖かい心が伝わりとともに、短編小説の特質がよく出ている作品であった。しかも、この小説が永井氏の19才の時の作品と知ったときの驚ろきの思いまで、あざやかによみがえってきた。

永井氏は後に短編小説の名手とも称えられ、昭和50年代まで数多くの卓越した作品を残しているし、文化勲章も受賞した作家である。しか

し今の学生諸君にたずねてみると、ほとんどこの作家の作品は読んでいないし、名前すら知らない者も多い。時の流れとだけがかたづけられない、読書のあり方を考えさせられるものを覚えた。

読書には本来「見ぬ人を友とする」喜びがあるが、書物はまた生き物であり、現実の社会とは別の時間と空間を越えた自由な社会を形づくっている。読書とはつまり、現実の社会よりずっと人間的なこの精神の世界に身をもって生きることである。その世界は広く美しく、踏み入れれば生きる喜びもわき、また人間として高く生きることの意味も知る。そして生きていく上で慰さめと勇気を与えてくれる。「生きることの意味を知る」のは生活からだけでなく書物からであるとも言える。

未知の世界を開いてくれるとともに生きることの喜びや悲しみを与えてくれるのも、友情や愛情の相を考えさせてくれるのも、共感や感動をもたらしてくれるのも読書である。



第二次大戦の敗色濃厚の昭和19年の夏（15才

目 次

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| ● コンピュータ化にあたって……………清水 正男…1 | ● 図書館と私……………渡辺 深雪…10 |
| ● 読書との出会い……………井出 賢次…2 | ● 田島征三先生の講演を聞いて……………友野 理香…11 |
| ● わたしの
ヘンリ・ライクロフト氏……………塩入 秀敏…4 | ● 我が師“石垣りん”……………丸山 香世…12 |
| ● 「国際化」と「情報化」……………大橋 敦夫…6 | ● 車窓からの風景……………鈴木 文代…13 |
| ● 子どもと絵本と……………中山登美子…8 | ● 【図書館ガイド】……………14 |

のころ)から甲種飛行予科練習生として殉国の精神に燃え、死ぬことを生き甲斐にきびしい訓練に明け暮れの生活を送っていた。20年8月の敗戦とともに虚脱状態で復員し再び中学(旧制度)生活に戻ったけれども、戦後の混乱と180度価値観の転換した中で魂の彷徨とも言うべき虚無感と絶望感の日々を余儀なくされた。

何かを求めて手当たり次第の乱読の日を送っている中でヘルマン・ヘッセの「デミアン」にめぐり合った。自らに忠実に生きる主人公の姿に言い知れぬ感動を覚えた。それまで、まわりに左右され、時の流れに影響されて自我のない浮き草のような人生を送ってきた自分の生き方に鉄槌をくだされた思いを味わった。それは私に新しい生き方と読書の意義をしみじみと教えてくれるものがあつた。

それ以降、常に自らを見つめ、自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の足で歩くという主体的な人生を考えるようになった。多くの書物の中で人間形成の糧となった書物の一つとして今も忘れない小説が「デミアン」である。

ヘルマンヘッセの作品で評価の高い「郷愁」の価値を認めても、私にとってはヘッセと言え「デミアン」とも言える作品で、人生観を築くうえでも、価値観を確立するうえでも手助けとなってくれた小説である。「デミアン」は私の心の友であり、人間形成の糧として読書を考えるようになった記念すべき作品である。

それ以後、読書を抜きにして自分の人生は考えられないものとなった。

すぐれた書物は読者の人間性を刺激し、その人の人格形成に大きな影響をもつ。心に残る読書とは、人間の生きざまを如実に示してくれる書物と出会うことである。青春時代にそうした書物とどれだけめぐりあえるかによって、その人の人間性や生き方に大きな影響を及ぼすものである。



「本を読む順序のシステムは教程のように初めから人工的には決まらない。次から次へと自

然に導かれるべきものである。次の本を選ばせるだけの暗示を与えない本は、その当座は自分に役立たぬ身に添わぬ本と思えばよい」(学生と読書)戸坂潤)との説もあるが一度は身に添わぬ本でも何年かたてばよく理解できる書物もあることを忘れてはならない。

漱石の作品のいくつかは何度も読み返す必要がある。年令を隔てて読むたびに新しい発見や新たな感動をもたらしてくれる。

鷗外などは系統的に読むことの大切な作家である。「舞姫」から「青年」「雁」などの理想主義的青春小説へ、更には「歴史其儘」の小説「歴史離れ」の小説へ、そして「史伝物」へと読み進むにつれて作家の全貌が表われてくる。「文は人なり」の深い意味も見えてくる。

若き日に心ひかれた書物は何らかの意味で人生を支えてくれる。さまざまな読書の中から自らの読書を見出すことが、読書の喜びを知り、読書の意義を高めることを知ってほしい。

(教授)





わたしのヘンリ・ライクロフト氏

塩 入 秀 敏

君たちは、ヘンリ・ライクロフト氏を知っているか。この英国人を、もし知っているという学生がいたら驚きだ。相当のオジンギャルだ。万が一にも好きだなどという学生がいたら、驚きを通り越して気持ちが悪い。そうなれば、もうオジギャルだ。

わたしのヘンリ・ライクロフト氏との出会いは多分に偶然によるものだった。大学の2回生になったばかりで、京都にいた4月も早い頃、入学式もまだ行われず、講義が始まるのは半月も先といった頃のことである。ひまな時はよくそうしたように、その日も古本屋まわりをしていた。今日は岩波文庫の『増鏡』を見つけようと、古本屋の棚を端から見て歩いていて彼に出会ったのだ。

丸太町通りのある店で、幸運にも程度の良さそうな『増鏡』を発見して急いで取り出したところ、あまりにもぎっしり入っていたので隣の本も一緒に出てきてしまった。星印のある岩波文庫である。見るとはなしに背表紙を見て驚いた。知らない本である。聞いたことも見たこともない本である。わたしは不安になった。というのは、岩波文庫に入るほどのものである、さだめし高名な人の有名な作品なのかもしれないわたしが知らなかったのは運が悪かったのだ、今これを買って読んでおかなければ後で恥をかくことがあるかもしれないと思ったのである。

小心なわたしは、いつもこんな風に思い、矢も楯もたまらず買ってしまふ。『増鏡』をこの時どうしたのかは忘れてしまったが、こうして買ったのが『ヘンリ・ライクロフト氏の私記』で、わたしとヘンリ・ライクロフト氏との邂逅であった。

* * * *

『図書館だより』への原稿を依頼された時、何か本に関することを書きたいと思った。すぐに思いついたのがヘンリ・ライクロフト氏のことである。彼の私記の中には本や読書についての記述が多く

「自分の本よりも図書館から借り出した本でよんだ方が書物はよめるという人がいるのも私は知っている。だが私には理解できないことだ。たとえば、私は香をかいだけで自分の本の一冊一冊がすぐ分かるのである。ただ鼻先をページの中につっ込んだだけで、私にはすべてのことがピンとくるのだ」

「その頃の私にとっては、金の意味は本を買うこと以外にはなかった。全くそれ以外にはほとんどこれといった意味はなかったのだ。矢も楯もたまらぬほど欲しい本、肉体の糧よりももっと必要な本というものがあった。もちろん大英博物館にゆけば見ることができたが、それは自分の書架上にその本をもつこととは全然別なことであった。ときどき、馬鹿げた書き込みで汚れはて、破れ、しみだらけになった、ボロボロのひどい姿をした本を買ったこともあった。それでもかまうことはなかった。よそから借りてきた本でよむよりも、どんなにひどくても自分の本でよむ方が私ははるかにすきであった」

「私はすべてに休息を求めたが、書をたずさえて一隅にあるときのほかはどこにおいてもそれを見出しえなかった」

「文字通りロンドンで餓死に瀕したときのこと、ペンでは食ってゆけそうにないと思えたときでも、心配もどこ吹く風とばかり超然として大英博物館での読書におびた日数をすごしたものだ」

「というようなくだりがそこかしこに出てくる。「自分の本よりも……」というような文章は、

『図書館だより』にはいささかマズイとは思ふものの、このあたりが、本を愛し、読書を無上の喜びとするヘンリ・ライクロフト氏の真骨頂だろう。

今のわたし、妻子をかかえ、その日の糧を得るのに汲々としているわたしには、ヘンリ・ライクロフト氏のような心境にはとてもなっていない。学生時代のわたしが、50才をすぎ、食うに困らない終身年金を得、南イングランドの片田舎に隠栖して、牧歌的な自然に囲まれて四季のうつりかわりを楽しみながら、静かな余生を散歩と読書とさまざまな思索にふけりつつ暮らした彼が好きだったのは、無為徒食の学生だったからであろう。今や、それは老後の夢である。けれども、本や読書について言えば、今でも彼が好きである。

* * * *

わたしには、ヘンリ・ライクロフト氏が描く南イングランド、デヴォン州の自然も印象的だ。というより、季節のうつりかわりを繊細にとらえる彼、そして、その風景の中にとけこんでいる彼が羨ましい。そのような生活が羨ましいのではない。それは老後の夢であると言った。動物や植物についての深い知識と、季節のうつりや風物に対する細かな観察力をもっていることが羨ましいのだ。

わたしは、動物や植物についての知識に乏しい。ほかのことだって自慢できるほどの知識をもっているわけではないが、とくに動植物についてはダメである。周囲の山々を彩っている紅葉の美しさには感動もする。あの赤いのはカエデ、黄色いのはクヌギであること位は知っている。しかし、細かいことになるとからっきしダメなのである。春の七草も秋の七草も、とてもではないが全部は言えない。だからヘンリ・ライクロフト氏の卓越した知識と観察力が羨ましいのだ。

* * * *

彼の私記を読んで、見たこともないヘンリ・

ライクロフト氏のことよりも、尾崎一雄のことが頭に浮かんだ。神奈川県小田原原の下曾我に暮らし、神社の森に来る鳥を望遠鏡で観察したり、細の野菜につく害虫を駆除しながら作家活動を読けた尾崎一雄のことである。尾崎が随筆「本とつきあう法」で「二十になるやならぬの野心満々時代にどうして(ヘンリ・ライクロフトなどに)ひかれたのかわけがわからない」と言っていることは後になって知った。これが後に『虫のいろいろ』その他の清澄な作品となって結実したことは間違いなからう。

* * * *

「私がイギリスに生まれたことをありがたく思う多くの理由のうち、まず初めに浮かぶ理由の一つは、シェイクスピアを母国語で読めるということである」とヘンリ・ライクロフト氏は言う。わたしもそういうことを自信をもって言えるようになりたいと思っている。

なお、ヘンリ・ライクロフト氏は、ジョージ・R・ギッシングが作り上げた自伝的な虚構の人物である。

(助教授)





「国際化」と「情報化」

大橋 敦夫

「国際化」と「情報化」。この二つの言葉は現代を読み解くキーワードと言えましょう。今回は、本学附属図書館のコンピュータ本稼働にちなみ、世紀末ニッポンを象徴するようなこれらの言葉について、日頃感じていることを述べてみたいと思います。

＊「国際化」という言葉の真の意味

諸外国語においては「国際化」という言葉は存在しない、とはよく言われることです。確かに多くの異民族からなる国が多い世界の趨勢からすれば、ほぼ単一と言える日本は珍しい国です。そのためか、自分たちとは瞳や髪の色の違いの人々を連れてきて、何かものを言わせれば、それが国際化であると無邪気に喜ぶ光景が、ここで見られます。これまた、世界の常識からすれば、たいへん変わった情景です。

英語の「international」のinterは、中とか間の意味を示す接頭辞で、語源的には国の中に入り込むという意味を持ちます。言語学者・鈴木孝夫氏が指摘されたように、古代ローマ帝国がその版図を拡大し、その結果として土着の言語に代わりラテン語の使用が広まったという事実は、その好例です。つまり、「国際化」は多分に侵略的要素を持っていると言えます。

＊日本語ブームの背景

したがって、昨今の日本企業の東南アジアを中心とする海外進出を評して、武力によって失敗した大東亜共栄圏の建設が、経済力によって達成されたという人がいます。いかめしい言葉が飛び出しましたが、本質を突いた見方です。その証拠として、近年の日本語学習ブームを挙げることができます。日本語の美しさや日本文学の素晴らしさにひかれて、日本語の勉強に取り組んでいる外国人がいるのは事実です。しかし、圧倒的多数の人々の学習目的は、日本語を

使って生計を立てることにあります。つまり、「日本語で食える」ような世界が出現しているのです。

＊日本語と「国際化」

世界の多くの人々が日本や日本語に注目するようになった現在、国語学の世界からは「簡約日本語」というのが提案されました。学びやすさを重視したのですが、あまり評判がよくありません。「国語」ではなく、外国語として日本語を教えるという研究が、もっと深められねばなりません。

また、さまざまな言語の研究も大切です。英語以外の外国語に堪能な人が極端に少ないのは問題です。ドイツの日本大使館においても、日本の外交官はほとんど英語で情報を収集しているとのこと。相手のことを知り、日本のことを知ってもらうためには、いろいろな言語に強い人がたくさん必要になります。

＊今、国文科に学ぶ意義

日本語教育において、留学生からは実に多様な質問が出されます。日本語に関することはもちろんのこと、歴史や文化、日常的な習慣などなど。それらすべての質問に正確に答えようとするのは容易ではありません。日本人だから、たいがいのことは大丈夫と考えるのは楽観的に過ぎます。辞書ですら、OEDやグリムのドイツ語辞典に対抗できる日本語辞典は無いのです。「国際化」が進めば進むほど、日本についてよりよく知る必要を痛感することになります。

日本語日本文学を中心に、関連諸科学を学ぶ国文科は、地味なようでありながら、「国際化」時代の基礎研究の場であると言えるでしょう。

＊研究における「情報」

さて、続いてふだんの研究活動における情報（主として国語国文学に関する学術情報）につ

いて述べましょう。

研究成果を論文の形で問う場合、その内容が独自の着想でまとめられていることが肝要なのは、言うまでもありません。しかし、研究者の人口が多い部門では、資料の特性などから類似の内容が生まれやすい場合も出てきます。そこで、発表の前には、研究の独自性を確認する意味で、関連する先行研究に目を通すことが必要になります。すなわち、『国文学年鑑』『国語年鑑』といった研究文献目録のお世話になるわけです。

* コンピュータ本稼働の真価

論文発表の前とは反対に、研究テーマの設定段階で研究文献目録を眺めることもあります。いずれにせよ、目録を手にとって確認していくわけですが、これがなかなか骨の折れる作業です。もちろんこれはこれで、特に初歩の段階では貴重な経験になります。が、いくつもの研究を並行させて行う場合には、膨大な時間が必要になりますし、見落としも予想され、現実的ではありません。こんな時こそ、コンピュータによる件名検索の出番です。テーマに関連する先行の研究文献目録が瞬時に完成するのですから、大変な時間の節約になります。

図書の貸出返却業務における省力化もさることながら、コンピュータ本稼働の真価は、この件名検索にあると言えます。

* 「情報化」時代の図書館として

国語学の分野に関しては、『日本語研究文献目録・雑誌編（フロッピー版）』が購入されましたので、今後大いに研究に役立つことでしょう。また、将来的には国文学研究資料館や学術情報センターともオンラインで結ぶことも可能なのですから、国文学を始めとする関連諸科学分野の研究に対する恩恵は、計り知れません。

次の段階で問題になるのは、必要な文献資料をどのようにして閲覧するかということです。新しい物は、相互協力ということで貸出も可能ですが、古い物に関しては、マイクロフィルム版の刊行が盛んに行われています。その読み取り機マイクロ・リーダーが本館に設置されれば

まさに鬼に金棒となるでしょう。

* 利用者が育てる図書館，データ・ベース

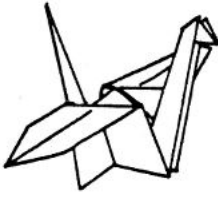
データ・ベース活用の極意として、データ・ベースはぬかみそと同じと心得るのが良いと言われます。つまり、絶えずかき混ぜていないとダメになってしまうというのです。

どしどし件名（キーワード）を与え、コンピュータに検索させることにより、どんな本があって、どの本がないか、たちどころに明らかになります。そのデータをもとに必要な文献は揃えてもらうよう購入希望を出す。この作業の繰り返しでデータ・ベースを充実させ、ひいては図書館の文献資料を豊富にしていくことにつながるのです。図書館の成長は、私たちの積極的な利用にかかっています。

「国際化」と「情報化」。本学においても、これからのキーワードでありましょう。

（講師）





子どもと絵本と

中山 登美子

私は、昭和30年代の始めに、保育所の保母になりました。保育所が県下のあちこちで誕生しはじめた頃でした。

その頃、福音館の月刊絵本、「子どものとも」が発行になり、級全員で購読することになりました。園の近くに書店もなく、絵本は、直接福音館から厚紙に包まれて、郵便やさんが運んで来てくれました。子どもたちは、毎月「小包ですよ」の声をたのしみに待っていました。

一番先に声を聞きつけた子が、走って行って肩に小包の絵本をのせて、いい顔で運んでいきます。それを車座になって、真中で包みを解き一冊づつ手渡します。

「いいにおい」と絵本を鼻にくっつけてから、ゆっくりと頁を開きます。部屋の中は、シーンと静まり返って、夢中になっている子どもの心が見えるようでした。

新米保母もおなじです。最後の頁になると涙が出てしまうこともありました。

一通りみ終わった頃、「読んであげるね」と声をかけてゆっくりよみはじめます。

「ダムのおじさん」「きつねのよめいり」(松谷みよ子文、瀬川康男絵)「三びきの子ぶた」(イギリス昔話、瀬田貞二訳)「きつねとねずみ」(ピアンキ文、山田三郎絵)など今でも子どもに好かれている絵本です。

何と云っても物が少い時代でしたから「本を大事にしましょう」なんていう言葉は、使わなくてすみました。

古新聞や包装紙とは名ばかりの紙で絵本袋をつくって、大事に家に持ち帰る子どもを見送ったものでした。お家の人によんでもらうのもたのしみようでした。

私は、子どもたちに人気のある紙芝居より、絵本の方を多く与えました。絵と物語が個性

的で、面白いものが沢山ありましたし、羨的だったり、教訓的でないのがうれしく思いました。

気に入った絵本は、何回もアンコールでした。そのうちに子どもたちが、声を合わせて、うたい出します、私のよんだようになります。こんな時子どもたちの前では、最高の自分でなければいけないと素直に思われました。

絵本を好きになったり、感動する心は、子どもとおともも変わりありませんでした。そんな心への働きかけを芸術というのかも知れないと勝手に解釈したこともありました。

絵本好きは、読書好きになり、学習好きになると信じたのもこの頃でした。

保育所は、集団の場ですが、出来たらひとり、ひとりに読んであげたいと心掛けました。

早朝保育の子を、膝の上に乗せて、午睡のきらいな子にはひそひそ声で、夕方お迎えを待つ子には楽しい絵本を、心をこめてよみました。絵本の世界に入り込んでいる子は、いやでない時を過しているのだと思うことで、保母のヒューマニズムの自己満足だったようです。



保母、よき母ならず。

娘は、小学生の頃「お母さんが、私のお母さんでよかったことは、いい絵本を買って来てくれたことかな、百回もよんで、お話も絵も、全部おぼえちゃってさ、自由画っていうと絵本の絵ばかり描いていたよ」と幼児期を思い出して云いました。よんでくれたことは、云いませんでした。

保母と母親と、主婦とをこなさなければならなかった時代は、心せわしいときでした。

わが子と楽しみながらなど程遠く、絵だけの絵本を注文したこともありました。

せがまれて読み出しても、昼間の疲れでうとうと、＼それから＼なに？と、ストーリーがつながらないのでしょう。質問ぜめの絵本の時間でした。母親のいない間は、絵本を見たり、絵を導いたり、切ったりはったりして、淋しがらずに居て欲しいと願いました。

保育所に入所しても、ひとりであることが多いと、担任の先生から云われ、驚きました。「ともだちとあそぶのは、とってもめんどくさい」と云います。ひとり遊びが、過ぎたことを反省しました。

娘は、保育園で大好きな先生から、絵本をいっぱいよんで貰ったようです。読書好きな子になりました。

自分の子育てを反省しながら、今、ことあるごとに、乳幼児にとって食事が体の栄養なら、絵本は、心の栄養ですと、若いお母さんによびかけているところです。



世の中は、よきものを求めて進歩し、発展し続けています。

子どもの絵本の世界も、豊富と多様とで氾濫しています。

人目を引くためとしか思えない色彩、ストーリーのまずさ、独創のねらい過ぎで品位のないものなど、どうしてなったのかと思わされます。

子どもがよろこぶからと云って、私達が納得出来ないものを与える訳には行きません。

ともに楽しめる、ほんものを選ぶことが、今私達の大切な役目のようです。

幼児期のうちなら、親と子と保育者が、好きになれるものだけを生活にとり入れて行くことが出来ます。

そして、集中するときをつくる。

いつも何かに流されて育つことを余儀なくされている子どもに、その子の発達に合ったペースで、絵本を通してたのしい、おもしろい、悲しい、こわい時間をつくる。

両親や大好きな保育者といっしょの時の充実感が幼児の成長のエネルギーになるのだそうです。

子どもとの生活の中で、絵本をよんでいる時が子どもでなく、人として向い合えるときでした。それは、二才児でも、五才児でもおなじです。絵本を見つめている眼や表情は、ひとりの人として風格でした。やがて立派に成長する人の姿を思わされたものでした。

正しい日本語を、ゆっくり心をこめてよむことで、保母であることの自覚にしたいと思いました。

(講師)





図書館と私



幼児教育科 1年 渡辺 深雪

短大生になり、初めて附属図書館に入ったのは、五月の中旬でした。

入学して、ようやく学校に慣れ始めたころ、「久しぶりに本を読んでみようかなあ」と思い図書館へ足を運んでみました。

荷物をロッカーの中へ置き、二階へ上がると書架にびっしりと並べられた本が数多くあり、絵本などの児童書も置いてありました。

また、カセットやCD、ビデオの視聴コーナーもあり便利だなと思いました。

よく図書館は、静かとか人が少なくて入りづらいとか言われますが、そんなイメージもなく多くの学生や先生方が利用していたので安心しました。

私は、小学生のころ図書館を利用していましたが、中学・高校と利用した回数が少なかったと気がつきました。

そして、そのように思うと共に私は、本を読む冊数が少なくなってきたと思いました。

なぜか私は、図書館へ通い始めないと本を読むというきっかけがつかめないのです。

だから、図書館で本を借りると「次はどんな本を読んでみようかなあ」という気持ちになるので、返却するときにまた次の本を選び、それ

から本を読む習慣がつくようになるのです。

しかし、ふとしたことで図書館へ行かなくなるとだんだん読書をするのが面倒になり、本に手をのばさないようになってしまうのです。

私の場合、図書館へ行くと本を読みたくするという不思議な効果があるのです。

たぶんそれは、本を読むことによって本の良さやおもしろさが少しずつ分かってくるからではないかと思いました。

私は主に小説をよく読みますが、読むたびに自分自身を見つめることがあり、本の力はすごいなと思い直したりできるからです。

そして、新しい言葉や知らなかったこととの出会いは私にとってのあらたな発見となり、それがテレビと違って聞きのがしたりすることもなく、はっきりと記憶されることが多いからです。

本は、自分で読むからそれだけ心に残ることが大きいと思いました。

短大に入って、さらに本や図書館の良さを知り、そしてコンピュータ化されていっそう便利になった附属図書館をこれからも大いに利用して、読書をする習慣をきちんと身につけていきたいと思いました。

図書館利用（貸出）ベスト20 ('90.9～'90.10)

順位	書名	著者名
1	うたかたノサンクチュアリ	吉本ばなな著
2	おんなの四季-女,妻,母,主婦をどう生きるか	勝部真良著
3	菜の花物語	椎名誠著
4	ピアニシモ	辻仁成著
5	ノルウェイの森・上	村上春樹著
6	さよなら、海の女たち	椎名誠著
7	後宮小説	酒見賢一著
8	今どきの娘たち	佐藤愛子著
9	木を植えた人	ジャン・ジオノ著
10	トリスタンとイゾルデ	リヒャルト・ワーグナー作,高辻知義訳
11	TVピープル	村上春樹著
12	アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス著,小尾美佐訳
13	白い手	椎名誠著
14	アンティック・ドルは歌わない カルメン登場	栗本薫著
15	哀しい予感	吉本ばなな著
16	キッチン	吉本ばなな著
17	ファミリー・レポート	森鴎子著
18	遠い海から来たCOO	景山民夫著
19	日本文学研究資料新集 17 石川啄木と北原白秋 思想と詩語	上田博・中島因彦編
20	超越しの祭	米谷ふみ子著



田島征三先生の講演を聞いて

幼児教育科 2年 友野理香

「理香ちゃん顔つきが変わったよ」と田島征三先生の講演が終わった時、隣りに座っていた友達が、私の顔を見て言った。友達のその一言で講演前の自分をふり返ってみると、確かに私は悩んでいた。特に最近、自分の性格、生き方など考えることが多くなり、外見共々、自分に自信をなくしていた。正直に言ってしまえば、この講演時間も考え事をするか、あるいは睡眠時間に使わせてもらおうと思っていたくらいだ。だからきっと暗く、さえない顔だったにちがいない。しかし、きちんと筋道を立てて話をしているのか、まるっきり思いつきでしゃべっているのかわからないような田島先生の話しっぷりに、私は不思議なくらいひきつけられてしまった。そして「自分は自分じゃない。信州の鎌倉じゃなくて別所温泉でいいじゃない」という田島先生の言葉と、あまりにもあっけらかんと言いつけるその姿に、私の心は一瞬にして動いた。

私が私について悟りを見たような気がした。「私は私でいい。周りにはたくさんのお優しい人がいるけれど、私は私らしくあればいい」とひらき直ると同時に、自分という人間が、少しばかり尊く思ってしまった。こんな私の心の変化が顔いっぱいに見えたのであろう。

話を聞き進めるうちに、少しずつ田島征三という人物が見えてきた。一風変わり者のように見えるが、先生はあらゆる物や人を、誰よりも正面から素直に見つめている。そしてそれらを決して同等のものと思わず、比較しないのである。「ぼくは外見だけじゃ、人はわからないと思う

よ」とスーツを着ずに私服のまままでステージに上がってしまう先生が言うから、よけい説得力があった。先生は別所をぶらぶらと歩いたと言っていたが、きっとその時も同じ服装だったのであろう。

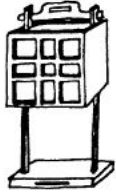
講演の後、感動のあまり先生の本を買った。とにかく先生のことをもっと知りたいと思った。「めっちゃくちゃなことばかりやってきたけれど無駄じゃなかった」と胸をはって言う先生に興味をもたずにはいられなかった。本の内容はとも衝撃的であった。先生はニワトリを食べる



ために子供の前で、殺して見せたそうだ。ニワトリも一生懸命生きている。しかし人間も生きのびるためにそれを食べる。「生きる」ということの重大さ、そしてその実態を先生独自の方法で教えているのである。それにしても私のような凡人には想像もつかないような事だ。「すごい人」としか言えない。

先生は自分で見た事を、ありのまま絵に世界を通して表現し、伝えようとしている。心のままに描くその強さが、多くの読者を魅了する理由であろう。先生の描いた絵本を見ながら育つ子供達は幸せだ。私は先生に出会えて本当によかった。私の人生観、保育観に一本筋が通ったような気がする。私が保母として子供達の前に立った時、田島先生の絵本に出会わせてあげたいと心から思っている。





我が師 “石垣りん”

国文科 1年 丸山香世

風景画を描くのが、好きだった。というより木を見ていることが、好きだったのかもしれない。山に囲まれて育ったせいだろう。樹齢数百年も経つような、神社の杉の木、裏山の団栗の木や、春にれの木、お気に入りの木が、いくつもあった。

学校には、テニスコートの傍に、大きな一本のいちょうの木が立っていた。いちょうは、いつだって呆れる程、自由奔放で、それが私をしばしば戸惑わせた。その年の夏も終わり、やがていちょうは葉を落としはじめた。

そう言えば、大きな壁にぶち当たり、ただ手をこまねいて、いらいらしていたのは、丁度この頃だ。肩ひじ張って、背のびして、他人のせいにしたりして、気を紛らせてみたけれども、すぐに虚しさに気付いた。この時、始めて自分というものを見つけた。

そして、だんだんと絵も描かなくなった。団栗の木も、コートの方のあのいちょうでさえ、気にならなくなった。

そんな時に、石垣りんが現われた。彼女は、私に大きな衝撃を与えた。

— 食わずには 生きてゆけない
 メシを 野菜を 肉を
 空気を 光を 水を
 親を きょうだいを 師を
 金もこころも
 食わずには生きてこれなかった……

食わずには生きてこれなかった……

冗談じゃない。私は違う。かぶりを振っても駄目だった。そこには、あらゆるものを食いつくし、のほほんとしている自分がいた。自らを犠牲とし、私を支えてくれているもの。その全てに甘えていた。ショックだった。

……ふくれた腹をかかえ

口をぬぐえば
 台所に散らばっている
 にんじんのしっぽ
 鳥の骨
 父のはらわた
 四十の日暮れ

私の目にはじめてあふれる獣の涙 —

これから先、どれくらいの物を食べつくしていくのだろうか。しかし、人は食わずには生きて行けないのだ。野性の涙を流しながら、それでも食べ続ける。師を、親を、友を食い、やがては石垣りんをすら食べなければならぬ。それが彼女の教えなのだから。

最近、無性に絵が描きたくなる時がある。木を見ていると素直な気持ちになる。がむしゃらに頑張ってみようと思う。ちっぽけな可能性も信じられる。

秋も深まり、あのいちょうの木も、葉を落とし始める頃だろう。枝葉で身を飾らない、この季節の木が好きだ。

本学の先生の近刊書 (89.10~90.10)

俳人白雄・人と作品 矢羽勝幸著

信毎 1990 6,800円

遺墨を中心にした本格的な伝記作品集。
 全集以後の新資料をすべて収録。

佐久の俳句史

矢羽勝幸著

樺 1989 4,500円

仙石秀久から青柳志解樹に至る四百年に及ぶ
 佐久の俳句史・庶民文化史。

車窓からの風景



国文科 2年 鈴木 文代

9月の終わりから10月にかけて、私は就職試験のために一週間おきに帰省していました。

県内の方でしたら、そんなことは別に珍しい事でもないと言う人の方が多いでしょう。が、私が一か月に二度も実家を往復するなんて、この一年半に一度もありえない事でした。

私の実家は新潟県の最北の市、村上という処でして、とにかく「遠い」のです。どのくらい遠いかと言いますと、どんなに急いでも、特急で上田から上野に出るより、時間にして一時間以上は長くかかります。ついでに言いますと、どんなに安く帰ろうとしても往復で二万円近くは必要とします。ですから、もともと三半器管の強いといえない私に帰省という作業は、気力体力を共に必要とするのです。一度でもあの年末年始や夏休みの帰省ラッシュに引っかかるものなら、卒業するまで家には帰るものと誓いたくなります。

そんな私が帰省の電車の中に楽しみを見つけたのは今年の春ででしょうか。

帰省の手段には二通りあります。一つはお金がかかっても早く帰る高崎経由。もう一つは、時間はかかるけれど安く上がって乗り換えなしの直江津経由です。最近では専ら、往きは後者、復りは前者という方法を使っています。

前にも書きましたが、私はとにかく乗り物に弱いのです。ですから6時間も電車に揺られるのはかなり辛いことです。が、3時間半しかかからなくても、「あさま」で碓氷峠を越えるプラス二回の乗り換えは、更に辛いことなのです。

他にも、乗り継ぎの時間が合わない等の理由があるのですが、直江津経由で帰省するようになった最大の理由は、車窓からの風景にあります。

信越線を下って新潟県をはぼ縦断するこのコ

ースは、三段階に分けて「帰って来た」と思わせてくれるものがあるのです。先ず初めは、上田から出発して二時間半後。柿崎—柏崎駅間。この間は、左手にずっと日本海が広がります。それから一度山の中に入りますが、長岡の辺りまで行くと、またいきなり空が広く感じられます。そして新潟までは、新潟平野のド真ん中を突っ切るように走ります。風景は一面田んぼ。地平線まで見えそうな程です。それが二番目。

そして三番目は、新潟駅で乗り換えて村上に着くまでの電車の中の風景です。これが一番私に「帰って来たんだ」と思わせてくれます。そう、聞こえてくる「言葉」です。新潟市から、更に北へ行くと、東北訛りのズーズー弁が目立ってきます。「ダスケ……ダネッカ」「ゴッシャケッゴト」同じボックスに座ったおばさん達や学校の帰りらしい高校生の会話。久しぶりに見る広い空と共にその独特のイントネーションに浸りながら、約一時間半程電車で揺られます。そして、家に着く頃には、私の言葉もすっかり元に戻っているのです。



【図書館ガイド】

本学図書館のコンピュータシステム

最近、公共図書館をはじめ各地で図書館のコンピュータ化が行なわれるようになってきましたが、本学でも9月新学期から貸出返却業務を本稼働させました。そこで、本号ではこのシステムがどのようなになっているか、どんな業務が出来るのかを簡単に説明することにします。

1. はじめに一導入の経緯

図書館の機械化というものは、ただ単に貸出返却業務がコンピュータ化され、利用者が便利になりさえすればよいというものではありません。

図書館業務は、図書の発注→受入→整理→目録→整備→配架→貸出という流れのもとに行なわれていますが、この流れの中で、同じ内容の記述を何度か繰り返します。

また、利用者の皆さんの目に直接ふれない仕事（会計業務、統計業務等）もたくさんあります。年度末には蔵書点検も行ないます。

これらの業務が、一度入力したデータを加工操作することにより、何種類かの業務が行なえることが理想的であり、能率化・合理化につなが

るわけです。

そのため図書館業務のコンピュータ化は、整備（ラベルの貼付等）の手仕事を除いたあらゆる業務がトータルで行なえることが必要です。

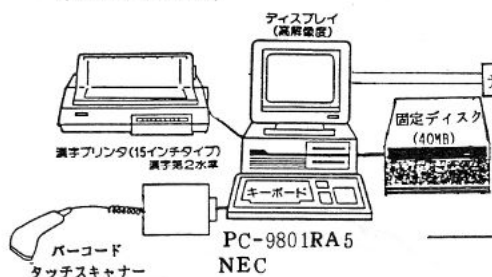
業務の合理化だけでなく、検索による資料の有効な利用、利用者サービスの拡大などが図れることも目的となります。

そこで、本学では数多く開発されているシステムの中から、経済性・設置形態・操作性などを充分考慮した結果、パソコンでの機械化を行うことにし、ブレインティック社の「NEW・図書II」の図書館総合管理システムを導入することにしました。

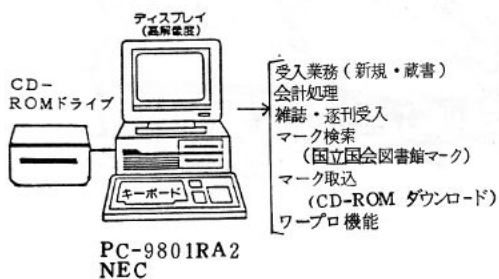
このシステムは、蔵書約10万冊まで、貸出利用者2万人、月間受入数4000冊まで可能とい

閲覧室（カウンター）

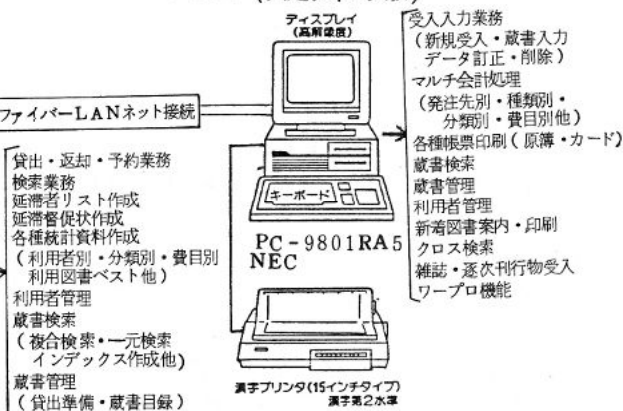
〈固定ディスク版〉



カウンター〈フロッピー版〉



事務室〈固定ディスク版〉



使用機種

PC-9801RA5	2台
PC-9801RA2	1台
ディスプレイ	3台
漢字プリンター	2台
ハードディスク	1台
バーコードリーダー	1台
CD-ROMドライブ	1台
無停電電源装置	1台

貸出・返却・予約業務
検索業務
延滞者リスト作成
延滞督促状作成
各種統計資料作成
(利用者別・分類別・費目別
利用図書ベスト他)
利用者管理
蔵書検索
(複合検索・一元検索
インデックス作成他)
蔵書管理
(貸出準備・蔵書目録)

受入力業務
(新規受入・蔵書入力
データ訂正・削除)
マルチ会計処理
(発注先別・種類別・
分類別・費目別他)
各種帳票印刷(原簿・カード)
蔵書検索
蔵書管理
利用者管理
新着図書案内・印刷
クロス検索
雑誌・逐次刊行物受入
ワープロ機能

うものです。

2. システム構成と業務の内容

会社等の会計処理や生産管理と異なり図書館のコンピュータ化はまずデータベースの構築を行わなければなりません。そこで平成元年4月より平常業務と併行して蔵書データの入力作業に全力を注ぎ、この9月に全蔵書4万冊のうち、閲覧室分の約26000冊の入力が完了したので、貸出返却業務をスタートさせたわけです。当初計画よりも早めにスタートできたのは、昨年度図書館司書課程実習において、同課程履修者によるバーコードの貼付作業の協力があったことも大きな力です。

システム構成と業務内容は前頁に図式で示した通りですが、昨年度2台のパソコンで(フロッピーベース)別々に業務を行っていたのを、9月より3台にし、(カウンター2台、事務室1台)光ファイバーケーブルによるLANネットで接続しました。カウンターのハードが貸出で立上っている時も、事務室のハードで各種の業務が併行して出来るわけです。

図式だけではわかりにくいと思いますが、図書館業務のほとんどの仕事がコンピュータ処理されるようになっていく点を理解していただけたと思います。

3. これからの計画

貸出をスタートさせたとは言っても、まだ全蔵書の入力が完了していないので、当面は引き続き入力作業を行なっていかなければなりません。必然的に検索も完了するまでカード目録と、コンピュータ目録の二本立て併用となります。

しかし、全蔵書のデータベースが構築されれば、利用は一層便利になると予想されます。

なお、むこう3カ年の計画は次のように予定しています。

(1) 視聴覚資料等のコンピュータ貸出

今、雑誌類・視聴覚資料のデータがコンピュータに入っていないため、貸出カードによる手貸し処理で手続してもらっていますが、いずれはこれもコンピュー

タ処理します。

(システムのバージョンアップにより可能となります)

(2) 各種マークの取込み

マークの取込みは現在国立国会図書館のマークのみに頼っていますが、タイムラグがあり、いまひとつ有効に機能していません。これに民間データベースを追加することにより新刊書の情報をいち早くキャッチし、資料を入手する計画です。

また、データをダウンロードさせることにより、新着書の整理が一段と早まることが期待されます。

(3) 学生用検索端末の開放

カウンターにある2台目のハードは、いずれ学生自身の手による検索が出来るようにLANネット接続します。

(4) 外部データベースの積極的利用

国文学研究資料館のデータや、新聞社の記事データを自館のコンピュータに通信回線で接続し、取込むことも、予算次第で可能となります。

また近い将来、公共図書館や他大学の図書館との接続も夢ではありません。

関係者の垣根をとりはらった協議が望まれるところです。

4. おわりにー 将来への展望

最近しきりに話題にされる『18歳人口激減時代』『大学冬の時代の到来』等の中で、各大学がいろんな経営努力を要求され、サバイバルな時代にいかに特色ある大学として生き残れるかが大きな課題になってきています。

このような時代に図書館は今までのような、薄暗い、利用しにくい図書館では、時代にとり残されます。その点、本学図書館は昭和55年に現在の独立館が完成し、明るくイメージアップされました。また、この10年間は建物にまけない中身の充実に努力をしてきました。

今後は、コンピュータ化とともに単なる図書館から『情報センター』として特色ある資料の収集、サービスの向上に努めなければいけないと考えます。

(長張)

